イノシシの好適生息地として機能する放棄みかん畑。
農山村の衰退、耕作放棄、土地管理者の不在などが関わる
重層的な社会問題の結果かもしれない

鈴木正嗣
岐阜大学 ／「野生生物と社会」学会 会長

改めて『「野生生物と社会」学会』

「野生生物と社会」学会…。つくづく素敵な名称である。今年度からの会長を仰せつかって以降、さらにこの認識を強めている。

私たちが取り組む農林水産業被害や植生被害、市街地出没等は「動物（生物）問題」などではなく、「現代社会が抱える諸問題」が、たまたま野生動物の姿を借りて現れ出たに過ぎない。逆の見方をすれば本学会は、野生動物への対応を通じ、多様な社会問題に斬り込んでいることになる。

ここでいう「現代社会が抱える諸問題／多様な社会問題」とは、人口減少、過疎・高齢化、中山間地域の衰退、財政事情の悪化、人材不足などなど、これからの日本社会で不可逆的に進行する（と思われる）現実である。したがって、率直に言えば「特効薬」は、ない。よしんば大幅に改善できたとしても、その改善策からは新たな問題が派生するはずだ。誤解を恐れずに言えば、特効性や即効性を標榜する言説にこそ、まやかしを疑うべきかもしれない。

しかし、悲観するにはあたらない。問題の連鎖にたゆまず地道に対峙する姿勢は、本学会の存在意義をますます高めるに違いない。会員個々人の研究や活動への意欲・気概も奮い立たせることになるだろう。

「野生生物」と「社会」とを併せ冠する学会名の素晴らしさと意義を、いま改めて噛みしめたい。